

元中央大学職員の

世界放浪 ②

石井誠啓 Masayoshi Ishii



遠い国の日本人

オラ!! (スペイン語でこんにちは)

グアテマラから、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカとバスで移動し、今はコスタリカにいます。

ホンジュラスではJICA (国際協力機構) の青年海外協力隊員の家にお世話になりました。彼はシャーマンガス病というこの地域特有の感染症の予防と対策のため、半年前から赴任しています。カラムシの一種が人間を刺し、血を吸います。病原菌を含んだ糞が傷口などから人間の体内に入ると、心臓が肥大していき、死に至ることもあります。彼はこの感

染症撲滅のため、仕事にやりがいを感じているようでした。

これまでのいろんな国で数多くの青年海外協力隊員と会いました。アフリカのジンバブエの孤児院では隊員による音楽コンサートを見学させてもらい、隊員達がすごく生き生きと子供たちと接しているのを見たとき、「ああ日本人、遠い国で頑張ってるなあ」と無性に嬉しくなったのを覚えています。

一方、疑問に思うこともあります。よく聞いたのが、派遣された仕事内容と実際の仕事が違っていることが多々あること。そこでどう対応するかは隊員次第だといいます。また、意外と専門外の人が派遣されている

のも不思議です。ソフトボール隊員の人と話したとき、「大学かどこかでソフトボールをやっていたんですか?」「いや、特技は水泳。土木工事の現場監督をしてたという元隊員の日本での職業は営業マン。土木の経験はまったくなかったと言っていました。今度、僕の友人が農業隊員で派遣されますが、彼女の専門は畜産です。最も驚いたのは現地での研修制度です。その制度は数年前に変わりましたが、それまで隊員は研修という名目で隣国に旅行ができませんでした。休暇に何をしようがかわらないですが、その旅費もODAの一部、つまり日本国民の税金からでているのです。

僕は日本で青年海外協力隊の説明会に行ったことがあります。実際に出会った隊員たちからの生の声とは印象が違います。また、旅を通じてひとつわかったことは、JICAやNGOとかそういった組織に頼らなくても意外とボランティアや国際援助の「場」はあるんだということです。

マザーテレサの遺志

エチオピア編

「あのーボランティアしたいんですけれど……」「いいわよ」。シスターからあっさり許可が下りた。

「Missionaries of Charity」(神の愛の宣教師会)。かのマザーテレサの施設である。最も有名なのは実際に彼女がいたコルカタ(インド)の施設だが、実は世界各国にその施設があり、ここエチオピアの首都アジスアベバにもあると聞いたので、興味を持った。日本にも東京、名古屋、大分などにその施設があるという。特別な技術を持たない自分に何ができるかと深く考えたことはない。



エイズ孤児院のお母さん、シスターマリアと一緒に
 =エチオピア、マザーハウス

子供が好き、ただそれだけ。日本で8年間子供と接してきた。子供たちをキャンプや課外活動に連れて行く団体に4年間、それから養護施設に4年。月1回だが続けていたのはただ子供が好きだったからだ。学生時代は子供向けイベントサークルに所属し、児童館などで子供に劇を見せたり、一緒にゲームしたりした。

保父さんになればともよく言われたが、仕事にするほどかというところまでの確信は持てなかった。たまに子供と接し、愛情を与え？元気を分けてもらおう。それで十分だった。それが僕のボランティアに対するスタンス。ボランティアという言葉にすると何かをしてあげるとい意味に解釈しがちだけど、少なくとも僕はそう考えたことはない。僕が楽しいからやっている。それでいいと勝手に思っている。待つてくれる子供たちは久しぶりに会うと嬉しそうに駆け寄ってくる。抱き上げたときは僕の方だったりする

なんて関係ない。エチオピアの子供もやっぱりかわいい。でもこの施設の子供たちはちよつと違うところがあった。彼らは両親をエイズで亡くしたエイズ孤児なのだ。

エチオピアは人口6700万人。そのうちの150万人がエイズに感染している。ちなみに国連エイズ合同計画の2004年度報告によると世界1位は南アフリカの530万人、第2位はインドの510万人、人口比率でいうとボツワナなんかは10人に3・7人がエイズに感染している。

これは国崩壊の危機といえる。

エイズ感染の子供たち

朝7時に敷地内の教会でミサ(礼拝)が始まる。さわやかな空気、教会に射しこむ朝日、子供たちの賛美歌が見事に調和し、神聖な雰囲気を作りだす。朝食後、子供たちは敷地内の学校へ、ボランティアは幼児以上の子一人ひとりにビタミン剤、結核予防等の薬を配布する。昼食後休憩し、あとは日が暮れるまでひたすら子供たちと遊んだ。2年前に建て

られたこの施設はまだ新しく、ボランティアには食事とベッドが支給される。

シスターは3人、現地人スタッフが10人以上、赤ちゃんから16歳くらいまでの子供が250人、成人女性患者が数人いる。僕ができること

といったら、子供を抱き上げ、振り回し、公園の遊具で遊んだり、サッカーをすること。エチオピアの公用語アムハラ語なんて全然わからなかったけど、そんな関係ない。初めは全身筋肉痛になったが、「抱っこして！」って笑顔で寄られ、そのまんまるい瞳で見つめられたら思わず抱き上げてしまう。泣いている子がいいたら起こしてあやさなくっちゃ。ほっぺにキスしてきたらうれしくてお返ししてしまう。「サッカーしようよ」ってみんなで詰め寄せられたら、疲れていても断れるはずがない。

両親を亡くしては彼らは人と人のぬくもりに飢えている。しきりに手をつなぎたがり、抱きしめられることを求める。無邪気な笑顔を見せる子供たちがいとおしくてたまらな

い。ふとした瞬間に僕をなんともいえない充実感が襲った。子供を抱きかかえながら階段を下りて施設全体を見渡してるとき。朝寒い中ミサのある教会へ向かうとき。ミサが終わり子供に両手を引つ張られながら歩いてるとき。僕はここにいられて幸せだなあつて。

名前を覚えられて慣れてくると、みんないっぺんに相手して欲しいってなるから大変だ。こっちは体が1つしかないのに、あっちに引つ張られ、こつちに引つ張られ、向こうから呼ばれたかと思うと、すぐそこで呼んでるし。あー分身の術が使えたらな、なんて下らないことを考える始末。子供にありがちだが、自己主張が強く、他の子を押しつけてでも自分に向いて欲しいって行動する。だから、そのときにケンカが起きたり、泣く子がでたり、まあ仕方ない、それが子供。

「その血に触っちゃダメ」

たまに子供も僕も調子にのって、アクシデントが発生する。遊具で遊

んでたときだ。一瞬目を離れたスキに小さな女の子が落ちてケガをした。かすり傷だが血が出ていたのでシスターのところ连接到いていたらすぐに消毒してくれた。そのとき、少し年齢のいった女の子が、「その血にさわっちゃダメ!!」って僕に対して叫んだ。ショックだった。その子は自分がHIVに冒されていて、血で感染することを自覚しているんだ。成人女性患者と話してるときも、「私はHIVだから夫を持ってないの」と聞いて、何も言えなくなってしまう。強い精神? 違う、どこかあきらめているような。明るく振る舞っている彼女らの心の内は僕が理解できるほど単純ではない。

アベルという寝たきりの少年がいた。弱りきった体は11歳とは信じられないほど小さく、腕は細い棒切れのよう。体中に水泡のようなものが無数にあつて、初めて会ったときからかぼそい声をだすのがやっとの状態だった。かろうじて食事をとってはいたが、ある日突然亡くなった。信じられなかった。前の日までは確

かに生きていたのに。目を閉じ、もうピクリとも動かない。なんてあつけない。そう、エイズ患者なんだから、病気で寝込んでるということには死に近づいていることを意味してたのに、なぜかまったく実感していなかった。心のどこかで数日後には元気になるんだろうって勝手に思い込んでた。僕が見ていた彼の日々はまさに命の灯火が少しずつ消えていくところだったのに……。

つぐらな瞳に映る未来

ここにいる子たちは、一見元気いっぱいなため忘れてしまいがちだけどエイズ感染者。ある日発症し、アベルと同じ運命をたどるかもしれない。家族に見守られることもなくただひとりベッドで死を迎える。

アベルの死体を前にしてもまわりの子供たちの反応が普通だった。慣れているのだろうか? 小さい子はまだだろうけど、ある程度歳がいった子たちは自分の身のエイズが何なのか自覚していると思われる。たとえ発症しなくとも、社会から隔離さ

れた施設の中でしか生きられず、家族もいず、まともな教育も受けていない彼らにいつたいどんな明るい未来が待っているというのだろうか。しよせん僕は通り過ぎていくいち旅行者。同情したところで何ができるというわけではない。

ここには赤ちゃんもいる。彼らはこれから先ずつとここで育つていくんだろう。親のぬくもりも知らずに成長していくんだろう。そしていつか自分のエイズに気づく。あるいは気づく前に生を終えるかもしれない。ある赤ちゃんがその小さな指で僕の手を握り、なかなか離そうとしなかったのが忘れられない。

両親がいて健康であることは実はものすごく幸せなことなんだって再認識させられた。普通に生きているとあたりまえのことすぎてなかなか気づけない。それが当たり前でない状況が世界にはある。今、こうしてることときだつて。

ボランティアの期間が終わり、施設をでていくとき思わず涙が出た。短い間だったけど、ここで大事なこ

とを教わった気がする。

マザーテレサの遺志

インド編

「メリークリスマスマス!!」。サンタクロースの格好をしたインド人のおじちゃん、クリスマスセールをしてる靴屋の前で微笑む。握手をした手には一粒のアメ玉を握らせてくれていた。粋なことするじゃん。

インドでクリスマスマス? いまいち想像できなかったが、意外にもコルカタの街はクリスマスに向けて、飾りやライトアップでにぎわいを見せていた。

マザーテレサの施設はカトリックなのでクリスマスは大きなイベントとなる。毎年ボランティアによる劇と聖歌隊による歌が催される。聖歌隊の誘いに二つ返事でOKした僕は施設にボランティアに行ったり、歌の練習に参加したりして充実した日々を過ごすことができた。

本番当日、世界各地から集まった大勢のボランティアとシスターの前で歌った。舞台裏手で待機してるとき、

高校生のときの合唱祭を思い出し緊張した。13もの違う国籍の人々がそれぞれの言語で歌った「きよしこの



食事は一日の重大なイベントだ=インド、マザーハウス

「天使にラブソングを」のようだった。ボランティアは朝7時にマザーハウス本部に集合する。有名なわりに敷地は狭い。

敷地は狭い。年末年始という時期もあつてか、

常に100人以上のボランティア

がいた。国

籍は実に

様々。さすが

マザーの影響力はす

ごい。朝食

のあと、そ

れぞれの施設へ出発。

公共バスや

リクシャー

(三輪タク

シー)を利

用して目的地へ向かう。午前中は8

時開始で正午終了。希望者は15時から18時まで働ける。施設は「孤児の

夜」は否が応でもクリスマス気分を盛り上げてくれた。そしてテンポ

のいい曲を歌ったときの気分は映画

家」「女性・薄弱者の家」「死を待つ人々の家」「障害者の家」などがあり、ボランティア登録さえすれば、自分の希望に応じて選べる。ボランティア期間もまったく個人の自由。必要なのはボランティアしたいという「意志」だけ。

「死を待つ人々の家」

「障害者の家」:

「死を待つ人々の家」(通称カーリーガート)には男性、女性合わせて100人くらいの患者がいる。結核、マラリア、エイズ患者等。清潔にしているのに、イメージして悲しさはまったくなかった。普通の老人ホームか病院みたい。毎日全てのシーツ、衣類を洗濯するので洗濯量がハンパじゃない。というわけでここのボランティアの仕事は洗濯が中心となる。

僕はたまたま死体を運ぶのを手伝った。遺体は毛布でくるまれていた。ずっしりと重い。この日に運搬された死体は4人。1日平均一人くらい亡くなっているとか。

黙々と洗濯し、それを屋根の上
に乾かしていく。10時ごろ休憩し、そ
のあと患者さんに食事の配給をする。
みんなガツガツ食べる。意外と元気
なのね。半分くらいは退院してい
くそうだ。あとは昼まで洗濯物を取り
こんだり、患者さんに水やしびんを
運んだりした。

ここでボランティアしてる日本
人看護婦さんたちに聞くと、新し
い薬を使いこなせてなかったり、薬
のチェックが甘いという。実際、間
違った薬で患者さんが亡くなった例
もあるとか。またミサ（礼拝）の
きに全員ミサに行ってしまった、患者
をほったらかしなのには憤慨したつ
て。一人ひとりのカルテは存在せず、
週1回の医者診療もいがかげんだ
とも言った。

僕は主に障害児の施設「ダイアダ
ン」でボランティアした。以前、日
本で障害者相手のボランティアをし
たことがあったが、この子たちの
ほうが重度障害だった。10歳前後の
子供が30人くらいいる。知的障害や
身体障害などで話せない子、手足が

不自然に曲がった子、自分で歩いた
り動いたりすることができない子な
どなど。ここではベッドメイキング、
掃除、洗濯、食事の介護、マッサ
ジ、服の着替え等がボランティアの
仕事内容となる。

ほんの数人は自分でトイレができ
るけど、ほとんどの子は小便、大便
とも垂れ流し。抱きかかえたときに
ズボンが濡れてるのがわかると、「あ
ちゃー、やっちゃってるか」とがっ
くし。パンツとズボンを取り替える。
オムツを替えることもあった。お
しっこつて臭いんだな、これが。

僕は食事をさせるのに苦労した。
担当した子の口にスプーンで食べ物
を運ぶんだけど、食べようとす
意志がない子は大変。首を振りつづ
ける子、常に眠気に襲われてる子とか。
栄養をとらせなくてはならないため、
無理にでも口の奥にスプーンを突っ
込むんだけど、これは怖い。いつ
たどれくらい量の量をどれくらい
ペースで？ のどにつまらせるの
はないかといつもひやひやした。隣
の子はえーんえーん泣いてるのにイ

ンド人の
おばちゃ
んががし
がし食べ
物を口に
突っ込ん
でいく。

おいおい、
大丈夫な
のかって
思ってた
まう。実際、

僕がいなかったときだけど、子供が
食事をのどにつまらせて亡くなった。

ここにはこのやり方があるのだ
ろうけど疑問を感じる時がいく度
があった。亡くなった子は気管支系
の弱い子で頭部が極端に小さく、自
分では動けない子だった。僕が最後
に接したときは、大きな目を見開き、
セキをしていた。寒いのだろうか
服をもう一枚着させてあげたのを覚
えている。それが僕が彼を見た最後。
ベッドメイキングのとき、彼の世話
をもうする必要がないことに気づい
たのがむなしかった。



ほおを寄せてくる子供を抱きしめることしか
できない

独りぼっちの子と「Xマス」

クリスマス当日、「ダイアダン」
でのクリスマスミサの日、洗濯が
終わらなくてなかなかミサに行け
なかった。乾いたものを棚にし
ま、さあミサに行こうとしていたと
き、ひとりの子を発見した。他の子
はみんな下の階でミサに参加中
なのに、なんでひとりだけ？ しかも動
き回れないように柱と腰のところを
布で縛られている。左目がなく、後
頭部と額の傷は膿んでいる。「うー
うー」って何か訴えてるようだ。



何種類もの香辛料が市場に並ぶ。よく見るインドの風景だ

やはり寂しかったんだね。正直、見た目は普通の子と違い目をそむけたくなるが、障害を持っていても心は同じ。愛情に飢えている。かわいそうにとすっかり抱きしめた。と同時に、なぜ神様は不公平なのだろう、と思った。なぜこの子は苦しまなければならぬのだろうか？ この子が何をしたというんだ？ これも輪廻転生の視点から考えれば、過去の行為（カルマ）の結果だということか？

何もできない僕はただ何度も歌った。少しでも愛情を感じてくれるようにと。結局ずっとこの子といたためクリスマスミサには参加できなかったけど、僕にとっては忘れられないクリスマスになった。

ボランテアとは？

シスターという優しい天使のイメージを抱きがちだが、実際はいろいろだと思う。あまり働かないシスターもいるし、おいしいものを食べ

てるからなのか太ってるシスターもけっこういるし。他のボランテアから聞いた話では、あるシスターは「これは私の施設の物だから」と言い張ったり、またあるシスターは「去年はボランテアはクリスマスプレゼントをくれた」と愚痴ったり、また「あれ買えこれ買え」とねだってきたり。

シスターだから立派な人だというのは確かに僕の勝手な思い込み。彼女らだって普通の人。でも一番マザーの遺志を受け継ぐべき人がそれじゃあ、つてちよつと残念に思うこともあった。ボランテアの中にもせっかくインドまでこのために来たのに憧れと現実の違いが思っている人も少なからずいるようだ。マザーの行いに惹かれ、集まってくる人々。でも奉仕は自国でもどこでもできる。インドのここだけにこだわる必要はまったくないし、ここが最も理想的な場所ということもないと思う。

マザーの遺志は世界のどこか特定の場所に受け継がれたのではない

ず。それはすべての人の心の中に受け継がれたんだと僕は思う。

サダルストリートの子ヤイ屋でよく顔をあわせるドイツ人のおっちゃんがいた。彼は長くコルカタに滞在していたがマザーハウスのボランテアはせず、批判的だった。「いいかい、なんでみんなあそこでボランテアをやると思う？ 友達ができるからだよ。そして一緒に旅に出るのさ。あるNGOがね、路上生活者に自国で集めたお金で食べ物援助するんだ。でも自分たちは3つ星ホテルに泊まってるんだぜ。彼らは自国で何もせず、集めた金で貧しい人に恵み、その同じ金で自分たちはいいホテルに泊まり、生活する。俺はボランテアなんか嫌いだね」

援助が何なのか、ボランテアが何なのか、僕ははまだよくわからない。結局、個人の判断、価値観によると思うしかない。僕は僕の信じようようにやる。入ってくる情報の100%は信じない。自分が体験したことだけ信じられる。答えはそこにある。

ひとり残されたこの子を哀れに思い、僕はその場から動けなくなりました。何が出来るわけでもないけど、隣に座っていると僕の手を握ってきた。寂しいのだろうか。クリスマスミサに参加できないこの子のために何度も「清しこの夜」を歌ってあげた。途中、アイルランド人ボランテアの女性がやってきて、「かわいそうだ」って、縛っていた布をほどいていった。するとしばらくして、この子は僕に抱きついてきた。ああ、